「お母さん」あっての家族

――家族レジリアンスという視点での聞き取り調査から――

得　津　慎　子*

A family would be a family with its “Mother-*Okasan*”

――Through the Family Resilience Interviews――

Shinko Tokutsu

要旨：「家族は『お母さん』あってこそ」である。家族レジリアンス要因探索の聞き取り調査での主婦の語りを通して、その家族の要としての自負心が伺えた。本論文では2つの聞き取り調査を紹介する。第1番目は求職中の主婦たちのフォーカスグループインタビューで、第2は、中途障がい者男性の家族のインタビューであった。後者では、妻は、いかに「可愛いだけの妻」から力を持った司令塔へと変化したかの過程が語られ、同時にインタビューにおいても関係性におけるその力のあり方がうかがわれた。これらの聞き取り調査の分析を通して、主婦役割の重要性が家族レジリアンスに果たす役割が浮かび上がってきた。本論文では家族の司令塔としての主婦について論じ、家族危機にあって彼女たちがその力を認識するに至る過程について考察する。

Abstract : A Family would be a family with its “Mother-*Okasan*”, which is a housewife mother. Housewives’narratives through the interviews searching for the key factors of the family resilience reflect the strong self-conceit that they themselves are the commander of the family and household. In this paper I introduce two of the qualitative researches. The first, I carried out a focus group interview for the middle aged housewives who are enrolling the list of the employment secure center. And the other interview was carried for the family whose father had become handicapped. In this interview, the wife as well as a mother and housewife articulated the process that she had become a commander from the “pretty” wife, when the family interview also shows their changing power constellation. According to the analysis of these interviews, the importance of the roles of housewives emerges for the family resilience. In this paper I’ll discuss about the role of the housewives as a family commander and consider about the process that they have come to recognize their power during their family crises.

Key words： 家族 Family　お母さん *Okasan*　主婦 housewife　語り narrative　家族レジリアンス family resilience

*関西社会福祉科学大学社会福祉学部　助教授

Ⅰ　はじめに

近年、社会福祉実践において「地域」・「在宅」での「自立支援」が謳われる中で、家族への注目が高まり、家族の役割や機能が再考され、家族ソーシャルワークの必要性も認識されるようになった。しかしながら、日本において家族ソーシャルワーク研究は未だその緒にあり、具体的な家族ソーシャルワークの方法論も余り論じられていない。家族を単なる社会資源の一つとして「利用」するための家族ソーシャルワークであれば、家族の福祉探求のためのソーシャルワークとは言えないであろう。個人のウエルビーイングが論議されるように、家族自身のウエルビーイングも議論を重ねる必要があるわけだが、今日の援助論の流れからも家族の主体性の重視が求められている（Kaplan ほか、1994）。家族の主体性を尊重するとき、家族自らの回復する力、家族が自分たちで機能する力を信じること、つまり、家族レジリアンスという概念（Walsh, 1996）が浮かび上がってくる。

家族レジリアンスとは、家族が危機的状況を通して家族が家族として回復する可塑性である。家族には家族としてのストレングスや健康な潜在力がもとより備わっており、現場実践にあたってそれらを活性化するような働きかけが求められる。ワルシュは家族システム自体が持つこの力が機能するように家族システムに働きかけることが家族療法において有用であると述べており、筆者はそのワルシュの家族レジリアンス概念を紹介し（得津、2000；2002；2003；2006）、ワルシュに基づいた「家族レジリアンス尺度」（Family Resilience Inventory、得津・日下、2003）を作成し、具体的に社会福祉の現場で援用できるツールの開発に向けて調査を進めている。

本研究の最終目標は、家族が家族レジリアンスをどのようにとらえているかを問い、「家族が危機から回復するにあたっての家族みずからの力」の過程を明らかにし、具体的実践のツールの開発を試み、より効果的な家族ソーシャルワーク方法への貢献をなすことである。

現在までにいくつかの調査を行っているが、それぞれ、他の調査分析を組み合わせるトライアギュレーションや、その調査分析法の専門家によるスーパービジョン、あるいは、調査対象者によるフィードバックなど、より信頼性、妥当性を高めるためにも一層の調査が必要であり、まだ全体的な報告には至っていない。

しかしながら、その中で、家族が回復、維持される過程における「主婦（お母さん）」意識が顕著に浮かび上がってきた 2 調査が印象的であり、本稿では、「主婦（お母さん）」意識という見地からその 2 調査事例を紹介する。一つは、主婦層へのフォーカスグループインタビューであり、もう一つはある中途障がい者の家族への聞き取り調査であった。

家族を研究対象とするにあたっては、まず、「家族」の同定から入らねばならないかもしれないが、「家族」を巡る様々な言説は到底一つの定義に収まるものでない。本研究では多様な家族に対応できるように、調査に当たっての「家族」についての前提を次のようにした。

① 「家族」の形はいろいろであり、現在一人暮らしの場合もあり、未婚、既婚、子どもの有無は問わない。「家族」とは「自分たちで家族だと思う人々が家族」である。また、家族だからと言って、必ずしも相互に引き受け合う必要はない。

② 「家族の回復」の状態は、必ずしも「しあわせ」で「問題のない」状態を指すわけではない。唯一の「家族」の理想像を呈示するものでも、その枠組みにはめようとするものでもない。

③ 家族と個人やウエルビーイングの考え方は多様であり、それらに対して単一の価値観を呈示しようとするものではない。

Ⅱ　研究方法

ところで、研究法としての聞き取り調査の有効性については多くの議論がなされているが、筆者が依ってたつのは、社会構築主義者たち（Garfinkel 1967； Berger & Luckmann 1966；Burr, 1995 ら）の「現実は相互行為の過程の中で社会的に構築される」という立場である。ブルーマのシンボリック相互作用論（Brumer, 1969）の 3 つの前提は次の通りである。①人間はものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する。②ものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導きだされ、発生する。③このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする[1)]。つまり、行為と意味は社会的相互作用として現実〈リアリティ〉構築のリフレクティブ（相互反映的）なフィードバックループの過程として共犯的に立ち上ってくるものである。その立場に立てば、クリフォードとマーカス（Clifford & Marcus, 1986）の観察者（見るもの－報告するもの）と行為者（見られるもの－調査「対象」者）との権力関係、つまり観察者の報告は観察者が意味付けた真実に過ぎないという指摘は重要である。調査と銘打つ行為・関係においては、「調査者＝観察者＝報告者」と「調査対象者＝行為者＝見られ、語られるもの」との相互作用と調査者の権力的立場を考慮しながらの調査、報告である必要がある。それは単に調査者が調査対象者についての記述をあたかも客観的事実であるかのように語ることを戒めるというだけではなく、より積極的な新たな関係・分析・報告の方法が求められているということであり、そのような方法論が多く試されている途上ではある（波平、2006； Uwe, 1995）。

同時に、社会福祉の社会的役割や構造が変化し、多職種連携の中で、社会福祉実践の効果やコストパフォーマンスが問われる昨今、アカウンタビリティを果たしうるエビデンスベーストな研究がますます必要とされている（芝野、2005）。現実〈リアリティ〉というものが極めてローカルな「私」の「語り」でありながら、それが閉ざされた「私」だけの「語り」にならず、他者に向かって開かれていくためには、「私」の「語り」を共有化できる工夫が必要である。

筆者はそれらを踏まえて、次のような前提で一連の家族レジリアンスについての聞き取り調査を計画した。第 1 に、調査は調査者と調査対象者との相互作用の過程であり、調査の間にその内容は変化生成する。つまり「家族」や「家族レジリアンス＝家族の達成や家族の回復」について語ることは、その家族や語り手の現実〈リアリティ〉を変化させる。第 2 に、第 1 の前提にたって、インタビューやグループディスカッションに参加しながら、筆者も含めて調査対象者全体に影響性がないということはあり得ない。家族危機を語ることによって、却って「家族危機」が招来されるおそれもある。家族レジリアンス〈家族の力〉について考え、語れば、家族の力が強くなることもある。いずれ影響があるならば、調査の影響性が肯定的に働くこと、語ることが家族の力を増すような語りとなるように企図した。家族に肯定的な変化を生むような聞き取り調査とするためには、調査のインタビューガイドや調査者とのやりとりに工夫が必要であり、また、具体的な効果測定によって、聞き取り調査の影響性をはかることも重要ではないかと考え、調査 2 において効果測定を行うこととした。

【調査 1】

(1) 調査参加者と調査方法

「何らかの困難に出会って、そこから回復している家族のお話しをうかがいたい」ということで、社会福祉関係の知人に依頼。2003 年 12 月に中途障がい者 A さんの家族への聞き取り

調査を行った。A さんは 3 年前に事故により中途障がい者となり、現在は自宅を改築してバリアフリーの住宅で、家族 3 人で暮らしている。聞き取り調査はその地方都市近郊の A さんの自宅で、家族全員と、紹介者の D さん同席で行われた。

家族は A さん（60 歳）、妻 B さん（60 歳、専業主婦）、長男 C さん（18 歳、大学 1 年生）であった。D さんは A さんが事故に遭ってから、自宅で生活できるようになるまでずっとサポートしてきた専門家であり、こうした面接になれていない家族がリラックスできるようにという D さんの提案を家族が受けた形の同席となった。

筆者は、「家族システム」はゆるやかに周辺システムと相互作用しているものであると理解していること、また聞き手である筆者がいる以上、家族のみの閉ざされたシステムとして話を聞く訳ではないことから、A さんの受障後の過程に関わってきた D さんが同席することに違和感はなかった。しかしながら、A さんの回復の過程に D さんが深く関与しているため、本調査における D さんの影響性はかなり高いと予測された。

（2）調査内容

①　半構造的面接法による家族と D さんも含めた調査者との話し合い

②　インタビューガイド

まずは、家族療法の面接と同じ様にジョイニングにつとめた。ジョイニングは家族療法の技法の一つで、家族とセラピストからなる問題解決システムをより速やかに形成するための、社交的な導入の過程である。家族のコミュニケーションのスタイルに合わせるなど家族と仲良くなるための細かな配慮がなされた。インタビュー項目としては、次の 2 つの質問が基本であった。

「A さんが怪我をされてみなさん、大変な経験をされましたが、こうして今は、ご家族で家も新築されて、一段落かと思われます。その大変な過程をどのように皆さんで乗り越えてこられましたか？」

「乗り越えることができたご家族の決め手は何だったと思われますか？」

③　調査者

家族療法実践家でもある筆者。面接において最大限、介入的になることは避けた。しかしながら家族での語りや質問を通して、少なくとも家族が意気消沈したり、悪くなったと感じられる状態になったりしないように肯定的な語りになるような配慮を行った。肯定的側面を取り上げ、リフレーミングと言われる肯定的言い換えを多用した。

④　記録

A さん一家の承諾の下に録音し、その記録を逐語録として第 3 者がおこした。

⑤　倫理的配慮

調査に先立って、カセットテープによる録音の同意を得、匿名性と守秘義務の確保と、必要であれば結果のフィードバックを約束した。聞き取り調査の影響が何らかの形であったときには、D さん経由で調査者がフォローできる形を作った。また、参加者の肯定的な変化を求めるということは、調査が介入、つまり治療的意味を持つと言えるが、「ご自分たちの達成やご家族の持つ力に気づいて頂くことが主旨なので、話しをして頂くことでいやな影響がでないようにしたいと思います」と調査の意図を説明することで、介入的になることは理解して頂いた。だが同時にこの説明が介入的になることを調査者は意識した上であった。

⑥　家族レジリアンス尺度のアンケート

ワルシュに基づく家族レジリアンス尺度（FRI、得津・日下、2003；2006）44 項目によるアンケートに予め記入して頂いた。4 件法で「とてもよくあてはまっている」を「1」に、「まったくあてはまらない」を「4」としたものであった。このとき（2003 年）のアンケートの目的は家族レジリアンス尺度開発にあたっての精度を高めることと、聞き取り調査の分析の

参考にするためであった。そのため、ポストテストは行っていない。

（3）分析方法

① 修正版グランディッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）（木下、1999；2003）による分析

本調査は「家族はどのように危機的状況から回復するかーどのように今日までその状況を乗り越えてきたか」についての質的研究であり、明らかにしようとする現象を static にではなく dynamic な概念としてその相互作用を捉え、家族が危機的状況や困難から回復し、その日常的に生活しうるようになる過程を明らかにするものである。家族レジリアンスに相当する概念は実は家族アセスメントの項目として多く語られて来ている（岡堂、1991；Hull, G. ほか、2006；Touliatos, J. ほか、2001）。しかしながら、それらは static な静的モデルと言え、筆者はそれらのアセスメント項目の多くを、実は実践に際して家族に働きかける際の手がかりとして捉えている。本調査はそれらがワルシュの言う家族レジリアンス概念とそのように一致しているかを見るためのものである。そこで、その絶えず変化生成するものとしての手がかりに注目する点で、相互作用と過程に注目する概念生成のための修正版グランディッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いることとしたものである。

分析テーマは「家族危機における回復の過程における家族レジリエンス要因」であり、分析焦点者は「家族」として、分析ワークシートを用いて、概念名を付けた。ただし今回の分析は、A さん 1 家族だけであり、家族レジリアンスの要因についてのより妥当で信頼性のある概念抽出のためには、他の事例も加えて、M-GTA の経験の深い研究者のスーパービジョンを受けた上で一層の分析の必要がある。これらについては家族レジリアンス概念を抽出し、具体的な方法論へと援用する過程における今後の課題としたい。

② M-GTA において、調査者と調査対象者との相互作用は一般的に見ないとされている。しかしながら、筆者は本インタビューにおいて、「明らかな介入」はなかったが、家族療法的なアセスメントに基づいて家族とのやりとりを行い、そのフィードバックループの報告は重要であると考えた。そこで、A さんの家族関係に特徴的であると思われた変化への手がかりをキイ概念に、調査者の「語り」としての事例考察的な分析を加えた。

（4）調査結果

① M-GTA による分析の結果

M-GTA に則って分析した結果のストーリーラインは以下であり、概念図を図 1 に示した。

「家族の危機的状況」から「家族の立ち直り」に当たっては、まず直後の家族のパニック状態がある。このとき、家族はともかく大変だが、社会資源の利用と今なすべきことをともかくするという緊急事態への対処で切り抜ける。始めの頃は、家族間のコミュニケーションにはまだ遠慮がある。お互いを思いやることで却ってオープンなコミュニケーションができない。また、この緊急事態を乗り越えるためには、自分自身を大切にしなければならないという自己防衛や自分の世界を確保していこうとする気持ちも起こる。そんな中で、次々に起こってくる難題に取り組むためには、みんなで相談しなくてはならず、その中で気持ちのぶつかり合い等もあるが、それを乗り切っている間にオープンなコミュニケーションがなされるようになり、家族関係の変化とその受け入れがある程度はできるようになる。それには信頼できる人間関係や社会資源が安定していることも重要である。それは、親戚や近隣、友人等の私的なネットワークだけでなく、病院のソーシャルワーカーや子どもの先生、保険や社会福祉システム等の公的な資源の寄与も大である。しかし、家族関係の変化の過程は、善くも悪くも家族のお蔭で、何にせよ家族がその影響を受ける単位である。何よりも子どもがかすがいとなる。子どもへの

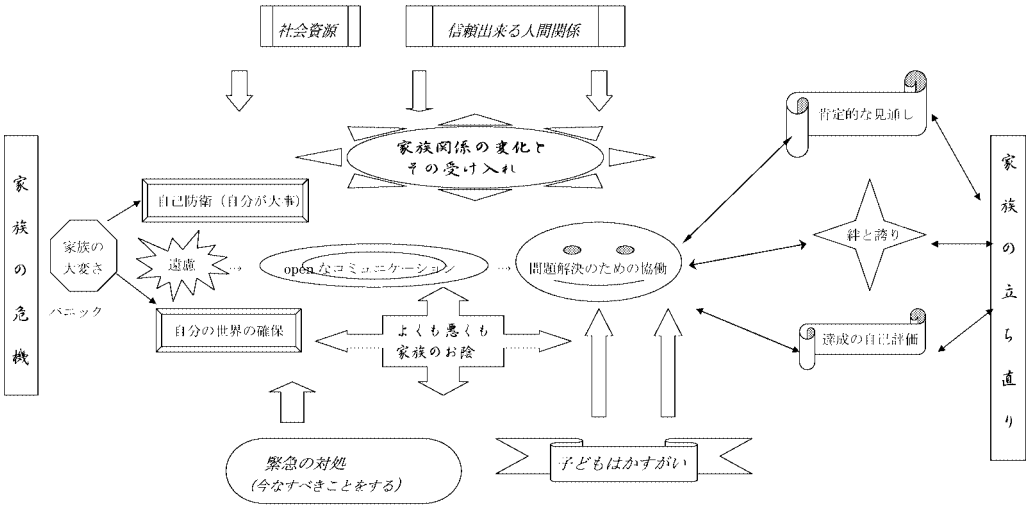

図 1 「A さんの家族の危機と回復の過程」の概念図

誇りや子どもの成長の記憶は夫婦にとっての共通の達成である。こうして協働体制ができ、希望の持てる見通しがつくと、改めて子どもや自分たちの達成への絆と誇りの気持ちが生じてくる。さらに達成と希望とその満足が相互作用して、家族の状態は安定的なものになっていく。

家族の危機における回復の過程における家族レジリアンスの過程が比較的スムーズなストーリーラインとして浮かび上がってきており、自分を守ろうとしたりパニックになるところから、オープンなコミュニケーションと周りのサポートで肯定的な見通しと互いへの思いが出てくることによって、より協働体制が作り上げられていく過程が示された。

② FRI（家族レジリアンス尺度、得津・日下、2003；2006）によるアンケートについては、家族 3 人による標準化されていないアンケート項目なので、特に数字的な分析を行ってはいないが、3 人の回答はかなり低め、つまり「家族レジリアンス」度は高い。夫婦の回答は殆ど重なって「とてもよくあてはまっている」を選び、総得点は少ない。C さんの回答にはかなり「どちらかというとあてはまらない」が多いが、それにしても得点が低い。つまりアンケートの結果だけから見ると、A さんの家族は家族危機を乗り越えて、家族レジリアンスが高まっている。その中で子どもの立場から際立つのは役割の混乱である。これは父親がリーダーシップを果たせず、母親が子どもを頼るという状況から当然予測される事態である。

③ 筆者の意図も含めたインタビューのやりとりの経過とその事例的考察

ｉ）調査者が呈示した「家族の力で危機を乗り越えられた」という枠組みの影響性

筆者は家族レジリアンスについて説明し、インタビューガイドにある質問をしたところ、A さんが「まだまだ途中で、解決したってわけではなくて、ずっと続くんだろうと…」と切り出した。それを B さんが「だから、お父さん、ここまで来れた、家族で、みんなこうやってくらせるようになれたんだから、」ととりなした。以下、B さんが積極的に「治る病気じゃないんだから、まだまだ大変だが、家族でそれを乗り切ってこれたのだから、これからもそうするのだ」と言い、それに対して A さんが悲観的な反論をするという繰り返しが見られた。A さんはもともと口が重いとのことであったが、

半身不随で言葉が明瞭ではないにもかかわらず、よく話された。しかしながら、B さんがもっぱら話しを取り、多弁に語り、2 時間弱の調査での会話総数は A さん 114 回、B さん 130 回、調査者 121 回であった。C さんは 1 時間で中座したが、それは、そのときの B さんの発話数のおよそ半分程度であった。

つまり、筆者はこの聞き取り調査を A 家が回復しているという前提で行い、その線上の「明るい話題」に方向付けた訳である。それを A さんが否定したにもかかわらず、B さんのサポートを得て、筆者は「必ずしも問題解決したわけではないが、とりあえず、ここまでやってこられたのは、それなりの力が家族にあったから」であると「肯定的」な枠は外さず、「ポジティブリフレーミング」することによって A さんの枠組みを却下した。これが夫婦の関係性の変化と関わってくるものと思われる。

ii）夫婦関係におけるパワーストラグル

B さんの「家族が立ち直った」という立場は調査者の枠組みをサポートする調査者からすれば有り難いものであったが、これは「A さん＝問題解決していない＝まだまだ大変」「B さん＝問題解決した＝私はまだまだ大変」という両者の違いの一方の意に沿う発言であり、パワーストラグル（力の奪い合い、権力闘争）という見方からは、B さんに加担し、B さんのパワーアップを助長するものであった。

このようにパワーストラグルと新たな関係性の受け入れが A 家の回復の過程においてもっとも重要なテーマであったように思われる。つまり、A さんはケアされることが必要な「弱い」存在になり、家族内での役割やパワーの変化が起き、その調整が必要であった。「めちゃめちゃなくらい可愛い妻」（実際は方言でもっと実感的な言葉であるが、地方を特定しないために標準語に変えた）と「頼り」きられていた夫との関係の逆転であった。話しの内容から事故まで A さんは典型的な家長として君臨していたことがうかがわれた。それだけに、B さんにすれば、A さんの事故の直後から、息子に頼りながらも、自分自身が決定権者になる過程は困難な過程であったことが語られた。また、A さんに対してケアの仕方、身なりの整え方、あるいは今後絵でも描いてこの生活をエンジョイして欲しい等の A さんにとっては侵襲的なのではないかと思われるようなことが語られた。それらを A さんは明らさまに拒絶して見せてはいなかった。

この役割の変化、パワーの逆転を受け入れることは、とりわけ、家父長的にすべてを決定してきた A さんにとっては辛いことであり、それが「家族に迷惑をかけたくない」、「死んだ方がまし」、「イラク（戦場）に行きたい」という発言となる。ところがそれらの発言は B さんの「ちょっと風邪をひいたらあんなに大騒ぎする人が死にたい訳がない」、「イラク行っても真っ先に送り返されてくる」等の発言によって行き場を失う。

A さんは B さんを世話する立場から、B さんにケアされる立場へと変化し、その関係性の変化を受け入れられるようになることが A さんにとっては「回復」なのかもしれない。殆ど自由に身体を動かすことのできない A さんの介護は、毎日ホームヘルパー等のサポートを得ても 24 時間体制で、B さんにとっては自分の健康をまず大事にせねばならない日常であったが、その介護ストレスを B さんは、A さんにぶつけ、A さんは「母ちゃん、怖いから」、我慢しているのであった。

パワーの逆転にはコミュニケーション様式の変化が見られ、それは次のようなエピソードで語られた。保険金がおりて具体的に自宅の改築の話が進みかけていた頃のことであった。A さんは「家に帰りたい」が、「家族に迷惑をかけたくない」し、「施設に行きたい」とのジレンマで、朝、来院した B さんが涙の痕を見つけることが再三あるほど葛藤していた。しかしながら、A さんは「施設に行きたい」と直接 B さんに言うことはできず、入院中相談相手と

なっていた D さんに訴え、D さんが B さんにそれを告げた。それを息子と相談した B さんが D さんに「それはダメだ」と言い、D さんが A さんにそれを伝えるが、A さんは譲らず、同じ D さんを介しての繰り返しが続き、ある日たまりかねた B さんが「絶対に施設には行かせない」と A さんに直接泣いて訴えて、そこから初めて家族 3 人で話し合って、改築に踏み切った。このことが契機で、家族で直接話し合うということが可能になったものである。

iii）「お母さん」と呼びかけられる対象としての自己の語り

ところで B さんの語りに特徴的であると筆者が感じたのはその自己相対的な語りであった。たとえば、「近所の人に良くしてもらっている」という話しは次のように展開する。「『今度（近所の人にそのお返し）してやれるかな、元気でいれば良いけど、お返しできるかな』とか、思ったら、涙出てきて、『お母さん、泣いたらダメだ』って子どもにも叱られる、『だからお母さん泣いたらダメだって。みんな好意からしてくれるから、だからお母さん有難うって、お母さんのこころが明るいからみんなこうしてくれるんやって、だから有難く貰ったら良いよ』って C が後から言うんやけど、これが嬉しいね。支えや」。つまり、「近所のひとと B さん」の関係は、息子の語りを通しての自己容認となり、そこではただ「好意を有り難く受けておけば良い」という息子のアドバイスのレベルから、「お母さんのこころが明るいからみんなこうしてくれる」という C さんの「近所のひとが B さんを評価している」というレベルに展開し、それらは結局、C さんの B さんへの評価であり、それが嬉しいという息子との関係性に収斂していく。B さんの語りの多くは生き生きとした会話体でなされ、他者、とりわけ息子の C さんの語りを通して語られる。「お母さん」と絶えず呼びかけられる自分に呼びかけ、「お母さん」と誰かとの関係を語るのである。その B さんが今は「主体」を獲得しなければならず、こうした B さんにとって家族が回復するということは、自らを「お母さん」として語りかけられ、語られる対象から、自らで語りかけ、語る主体となることなのであろう。夫婦間でなされているように思われるパワーストラグルは、関係性の変化、妻がリーダーシップをとり、夫が守られる対象になることで、納まりどころを見いだすのであろうか。A さんの家族が新たな構造で再構築されるのは、とりあえずの危機的状況が安定したこれからであることが推測された。もはや特別のサポートの必要がなくなったかのように見える今こそ、家族が自然にバランスをとろうとする力を発揮できるようなサポートが必要と言えよう。

（5）考察

当日の聞き取り調査においては、テーマが「家族の危機と回復」といういわば肯定的なものであったため、話しの内容もそのように展開した。しかしながら、調査者は「良かった、良かった」という話しの趣とは違うメッセージを受け取っており、A さんの家族はまだ、回復に至った、というよりも回復の過程の真ただ中にあるとの感を受けた。つまり、調査者の実感からなる「私（調査者）」の語りと「データ」の語りは違うという印象であった。当然 M-GTA による分析と言っても A さん 1 家族ではまだ概念形成には早すぎることや、ましてやアンケートの印象だけでは何も語れないこと等、当然のことかもしれない。また、家族レジリアンス尺度の信頼性もあろう。これらは単なる筆者の研究法の未熟さゆえかもしれず、それらについては今後の課題としたい。

【調査 2】

（1）調査参加者と調査方法

ホームヘルパー 2 級養成講座受講者の女性たちからなるフォーカスグループインタビュー（以下 FGI）。2006 年 3 月に調査者が講師をしているホームヘルパー 2 級講座の受講生から薄

謝で募った。「家族の危機と回復」というテーマで話し合ってもらうこと、家族危機は家族周期上も家族やひとの生活には付き物なので、特殊な経験について語ってもらうのではないということを強調した。講座は大都市 X 市で行われており、参加者も X 市近住であった。結果的に参加者は 4 名。30 代、40 代、50 代、60 代の主婦。その講座の性格上全員求職中であった。FGI では最低 6 名以上の参加が必要とされると言われており、また、分析後にフィードバックのグループを持つことが求められている。4 名は最小限の人数を満たしていないが、家族の危機という内容からも、一人一人の話しが長くなること、個人情報が語られるにはグループが少人数の方が適していることから、人数的には問題ないものと考えた。また、参加者が予め既知の関係であるということについては、既知ではあっても、ホームヘルパー 2 級講座は終わっていて、めいめいが個別的な関係を持っていないことから影響力は少ないと考えた。むしろ知人がいた方が話しやすいという結果は瀬畠らの研究報告にある（瀬畠ほか、2001）。

また、今後の流れとして、今回の分析の結果によりフィードバックのための同メンバーによるグループを持ち、それらすべての分析の妥当性については専門を同じくする研究者と検討する予定である。

（2）調査内容

① グループインタビューの方法

フォーカスグループインタビューを選んだ。FGI を選んだのは、FGI においては、参加者の相互作用を前提とし、それを活発にするように運営されること、グループダイナミックスによってテーマがより多様、多面的になることとによった（安梅、2000）。

② 聞き取り調査の効果測定評価のためのアンケート

効果測定のツールとしてワルシュの家族レジリアンス概念に基づいて開発された家族レジリアンス尺度（得津・日下、2006）とオルソン円環モデルに基づく FACES-KG（立木、1999）による尺度を作り、その評価のためのアンケートを用いて pre-test と post-test を行い、その差を分析した。

pre-test はグループの前に記入、post-test は後日の郵送を依頼した。グループの直後ではない方がインタビューの影響性が客観的に反映されると推測したものである。

③ インタビューガイド

まず、「家族には、さまざまな危機的状況から回復する力が自然にあるのではないか」ということに着目して、その力について具体的に明らかにしていくという本調査の目的と家族レジリアンスの説明をした。さらに、前述の家族についての前提を述べ、ひとは人生の節目でそれぞれの危機を迎え、自然に乗り越えて次の家族周期に向かうという家族周期説についての説明を加えた。

用意した質問項目は次の 3 つであった。

「ご家族に危機はありましたか？」

「それをご家族でどう乗り越えられましたか？」

「乗り越えられた決め手は何でしたか？」

④ 司会者

家族療法実践家でもある筆者が司会をつとめ、グループダイナミックスが働き、また、グループを通して家族レジリアンスが再認識され、少しでも家族レジリアンスが高まることを目指した。グループが肯定的に働くことを予期していたが、そうでない場合は筆者が肯定的側面を取り上げ、リフレーミングと言われる肯定的言い換えを行うようにつとめた。

⑤ グループ各員の承諾の下にビデオ 2 台によって録画した。当日の記録担当者 2 名が非言語的なものも含めた逐語録を起こし、筆者が何度もビデオと合わせて検討した。

⑤ 倫理的配慮

調査に先立って、調査企画書を配布した。本調査の目的や方法と同時に匿名性と守秘義務を約束し、ビデオによる録画の了解を求め、調査

同意書に署名して頂いた。更に口頭で必要であれば調査の分析結果のフィードバックと個人面接を約束した。

また、調査が介入にもなるという点に対しても、調査参加者に、調査は同時に家族レジリアンスと言われる家族の力により気づいてもらう過程であることを説明することで、求められない介入、同意のない治療という枠組みを回避するようにした。

（3）分析方法

FGI の一般的な分析方法として、安梅（安梅、2004；2006；ヴォーンほか、1996）らに倣い、第 1 次分析により重要アイテムを抜き出し、第 2 次分析により重要カテゴリーを示し、カテゴリー化した。その際、家族の過程（Family Process）と相互作用を明らかにすることを念頭においた。

（4）分析結果

① フォーカスグループインタビューにおいて、概ね 4 名が共感した内容の分析結果は次の通りである。

ⅰ）「お母さん」あってこそ

家族が自分たちの力で危機を乗り越えるに当たっての重要な鍵は、「お母さん」と名指される主婦、妻、嫁、母、娘が、家族や何かあったときには親戚も含めての司令塔として、ケアラーとしていかに機能するかであった。それは「『お母さんがすべて』だから」との参加者の一人の最後の言葉に大きく一同が同意したことからもうかがえる。参加者は自分は「お母さん」＝主婦、妻、嫁、母、娘としてのアイデンティティを持っていた。最後の司会者の「家族がこれまでやってこられた一番のポイントは何だと思いますか？」という質問への「そりゃあ、お母さんの後ろ姿じゃないですか」という答えに明らかなように、「お母さん」が家の要であり、その「お母さん」を中心に「家族」はまわっているのである。その自分が一生懸命役割を果たすことが、家族めいめいが自分自身の役割を果たし家族がまとまっていくための鍵であると感じている。そのための大事なことは家族員への平等性と食事である。

ⅱ）社会資源

社会資源、相談相手、経済力等が必要であり、専門家のサポートや相談機関、保険等の社会福祉サービスのシステムがより充実することが求められるが、そうしたそこにあるものを、家族は危機的状況によってどんどん使えるようになり、選択肢を増やしていく。

ⅲ）モデル的な家族を守る

家族は守るものであり、守ってくれるものであり、そこで、たとえば、同居している長男の嫁が老親の介護にあたるが、それは家族として長年生活するなかで、深い信頼関係を築いてきたからである。長い間危機的状況を通じて、協力していくことが、相互の信頼関係を強め、それが絆として深まる。つまり、危機や家族の過程を経ることは、家族が協働体制を作り上げる機会であり、また、危機的状況によって、社会資源をより外に求める力を得たり、オープンなコミュニケーションが獲得されたりするものと考えられる。

ⅳ）関係性の変化

関係性は距離と時間、コミュニケーション、期待される役割の面から語られた。また、スキンシップや近くにいること、時をともにすごすことは、その状況ともとからの関係性による距離と関連して重要な要素である。コミュニケーションは「言わぬが花」的なコミュニケーションが安定のためには必要であるが、家族の危機的状況を乗り越えたり、家族周期上の過程を経るにしたがってオープンになったり、また誰にどのように言うかについての様式が定まっていったりする。また、子どものことだけの会話であっても、夫婦の会話には工夫が必要である。期待される役割としては、家族にとっては子どもがかすがいであり、子どものことはとりわけ中年期の多忙な夫婦関係にとっては共通の切迫した話題である。同時に子どもも危機的状況のときには役割を果たし、頼りになるものであ

重要カテゴリー		重要アイテム	
そこにあるものを、危機的状況によってどんどん使えるようになる	モデル家族－何かのときには拡大家族も含めた全員体制－	父親は象徴	父子関係を大事に守る
		夫婦の愛情	もともと好きで結婚
			形だけでも夫の協力
		老親への愛情	介護は「嫁」（同居）
			生きていてこそ
		家族なれこそ	守ってくれるのも、守るのも家族
	「お母さん」あってこそ	母親の努力がポイント	ご飯が勝負
			一生懸命な自分の後ろ姿
			平等に扱うこと
	資源	社会資源	専門家のサポート
			相談機関の利用－公的機関のダメさ
			社会福祉サービス
			介護保険
		相談相手	恥をすてて誰にでも相談－サークルの重要性
			自分の身内－夫はダメ、役に立たない
			友人
			子どもたち
		経済力	何よりもお金－愛を育てるにはお金が必要
関係性の変化－年齢、家族周期、危機的状況によって変化－－危機的状況（家族がたすけあわなければならない状況）が変化のチャンス	距離と時間	スキンシップ	
		近くにいること	
		同居のちから－ともにする時間	
	コミュニケーション	言わぬが花	
		夫婦での会話の工夫	
		オープンなコミュニケーション	
	期待される役割	こどもはかすがい	
		父親をたてる	父親が機嫌が良ければ家は安泰

図 2　家族が危機的状況を乗り越えるにあたって重要であったもの

る。役割という点では、実際はどうであれ、夫が形だけでも協力してくれること、夫を父親としてたてること、子どもたちの順位を尊重しつつ、平等性を尊重すること等の役割を尊重することが大事である。関係性は、年齢、家族周期、危機的状況によって変化し、危機的状況（家族がたすけあわなければならない状況）が変化のチャンスともなる。

②　家族レジリアンス尺度による評価の結果

対象者が 4 名なので、統計的処理よりも個別にその結果を見た。全員に肯定的な変化が見られ、少なくとも否定的な変化には結びつかないことがうかがえた。大幅な肯定的な変化が見られた 1 名は、4 名の中では一番深刻な危機的状況にあると考えられ、揺れやすい自らの家族評価を支える必要性がうかがわれたとともに、この FGI が肯定的に働いたものと考えられる。設問ごとに見て行くと、肯定的な変化が見られた FRI 質問項目には、特に、本 FRI 尺度の妥当性を分析した結果やワルシュの呈示した家族レジリアンス促進の鍵となる要因との関連は見られなかった。これらは関係性についての設問なだけに変化しやすいものと思われ、結果から自信を持つことが肯定的な評価に結びつくので

はないかと想定された。

（5）FGI の考察

本 FGI は 4 名からなる 1 グループで 1 回だけの FGI であり、これを以て多くを語ることは困難である。また、中年とは言え、年齢差が大きいグループで、もっとも年長で語る力の強いメンバーの話しの内容に収斂されていく可能性もある。また、半ば社交的な場とも言える本調査の状況で、調和性の高い中年の主婦によって「家族の危機と回復」の理想的なイメージが語られ、それを全員がシェアしただけという可能性もある。しかしながら、そうであったとしても、非言語的な語りも含めての語られたそれが「家族の危機と回復」の一つの「真実」であることは否めない。

Ⅳ　ま と め

一般の家族の危機的状況と、障がい者になることを余儀なくされた初老の男性の家族では、家族レジリアンスの機能の仕方は異なってくるであろう。しかしながら、一見一般の家族にあってもその危機的状況は多様であり、深刻な場合も多い。また、今回紹介した調査はグループによるものと家族によるもので、そこからひとつの家族レジリアンスについての結論を導きだすことには無理がある。しかしながら、いくつか行っている調査の中から本 2 調査例を紹介したのは、「お母さん」というキーワードの語られ方によった。B さんも FGI での調査参加者も、「お母さん」と自らを語る。A さんの家族の聞き取り調査を B さんを中心に考えたとき、「お母さん」の自負や役割が危機によって変化し、危機に対処していったと考えられる。

FGI にもあったように、彼女たちの意識には、何はさておき「お母さん」が中心であるとの想いがあり、「お母さんが機嫌が良かったら、家は明るく、そうなると、お父さんも機嫌が良い」のである。かつ、「お母さん」たちが自らを語る家族は郷愁的と言っていい程に拡大家族も含めて家族全体が一体となって危機に直面する。父と息子との葛藤や、家族間、家族員の問題、家族と親族の葛藤が語られるが、それらは「お母さん」の努力のサクセスストーリーとして終結する。家族を担っているという意識を持っている主婦「お母さん」にとって、その自負こそが家族レジリアンス（家族の回復）の要因とも言えよう。

「お母さん」の多面的な役割意識と自負が、まずは、自己犠牲的な献身を伴って危機的状況の回復や家族周期上の家族にあって、柔軟に変化することが、家族の危機を乗り越えるひとつの大きなてがかりなのであろう。

また、本報告の調査で呈示された語りが家族レジリアンス概念に肯定的であったことは、一つには、調査における調査者と参加者の関係性にもともとの権力関係（調査 1 においては、A 家が感謝している紹介者の存在や調査 2 においては、調査者は参加者に研修を行った立場であった）が関連していなかったとは言えないであろう。何よりも調査者の調査をより回復へのてがかりにしたいという意図と関連があるとも思われる。これは、単に聞き取り調査の時や直後に肯定的な結果が得られたとしてもその持続のためには更なる働きかけが必要であることを示唆しているように思われる。今回報告した調査についても、更なる働きかけを工夫することやより緻密に分析を行うこと等を今後の課題としたい。

また、多様な研究方法の中のいくつかを採用したことについては混用であるとの批判もあるであろうが、調査の多層性を示唆するものでもあると思われる。今後より妥当で信頼性のある調査報告を通して調査の多層性をより明らかにしていきたいと思う。

家族が地域で様々な問題を自立的に解決するための家族ソーシャルワーク－家族支援への示唆として、本稿では、家族レジリアンスのあくまでもひとつの側面として、「お母さん」と自らを語る主婦の役割と変化の可能性について考察した。

引用文献

1）Blumer, Herbert（1969）*Symbolic Interactionin : Perspective and Method*. Englewood Cliffs.（＝1991　後藤将之訳『シンボリック相互作用論－パースペクティヴと方法』Keiso コミュニケーション　勁草書房.）

参考文献

安梅勅江（2004）『グループインタヴュー法』医歯薬出版

安梅勅江（2006）『グループインタヴュー法Ⅱ活用事例編』医歯薬出版.

Berger, P. L. & Luckmann, T.（1966）*The social construction of reality : A treatise in the sociology of knowledge*. Doubleday.（＝1977　山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社.）岩本隆茂・川俣甲子夫（1966）『シングル・ケース研究法：新しい実験計画法』Keiso Psychology. 勁草書房.

ハロルド・ガーフィンケル他　山田富秋・好井裕明・山崎敬一編（1993）『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』せりか書房.

Burr, Vivien（1995）*An Introduction to Social Constructionism*. Routledge.（＝1997　田中一彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店.）

Clifford J. Marcus G（eds）（1966）Writing Culture : The Poetics and Politics of Ethnography. University of California Press／（＝1996　春日直樹訳『文化を書く』紀伊国屋書店）.

Flick, Uwe（1995）. *Qualitative Forschung*. Towohlt Taschenbuch Verlag GmbH（＝2003　小田博志等訳『質的研究入門：人間の科学のための方法論』春秋社）.

Hull, Grafton H. Jr. & Mther, Jannah（2006）*Understanding Generalist Practice with Families*. Thompson.

Kaplan, Lisa & Girard, Judith,（1994）, *Strengthening High-risk Families : A Handbook for Practitioners*. Lexington Books.（＝2001　小松源助監訳『ソーシャルワーク実践における家族エンパワメント：ハイリスク家族の保全を目指して』中央法規出版）

木下康仁（2003）『グランディッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂

木下康仁（1999）『グランディッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂

波平美重子・道信良子（2006）『質的研究 step by step：すぐれた論文作成をめざして』医学書院

岡堂哲雄（1991）『家族心理学講義』金子書房

Perlmutter, B. F., Touliatos, J. et. al（eds.）（2001）*Handbook of Family Measurement Techniques : Instruments & Index Vol. –3*. Sage Publications, Inc.

芝野松次郎（2005）「エビデンスに基づくソーシャルワークの実践的理論化：アカウンタブルな実践へのプラグマティック・アプローチ」『ソーシャルワーク研究』31(1)（通号 121），20–29

瀬畠克之・杉澤廉晴・マイク・D・フェッターズ・ほか（2001）「質的研究における方法論の妥当性に関する検討：フォローアップアンケートの結果から」『日本プライマリ・ケア学会誌』24(4)

立木茂雄（1999）『家族システムの理論的・実証的研究』川島書店

得津愼子（2000）「家族援助における家族レジリアンスという視点－システム論に基づく家族療法の事例を通して－」『関西福祉科学大学紀要 3 号』

得津愼子（2003）「家族レジリエンスの家族支援への臨床的応用に向けて」『関西福祉科学大学紀要第 6 号』

得津愼子・日下菜穂子（2003）「家族支援に有用であると思われる家族レジリアンス概念を用いた家族機能尺度（FRI）の作成の試み」『日本家族心理学会第 20 回大会紀要集』

得津愼子（2004）「家族レジリエンスの家族支援への臨床的応用に向けて」『関西福祉科学大学紀要第 7 号』

得津愼子（2006）「家族レジリエンス尺度作成に向けて」『関西福祉科学大学紀要第 9 号』

得津愼子・日下菜穂子（2006. 12 掲載予定）「家族レジリエンス尺度（FRI）作成による家族レジリエンス概念の臨床的導入のための試み」『家族心理学』

Vaughn, Sharon, Schumm, Jeanne Shay & Sinagub, Jane M.（1996）. *Focus Group Interview In Education and Psychology*. Sage Pub. Inc.（＝1999　田下　理監訳『グループ・インタビューの技法』慶応義塾大学出版会.）

Walsh, F.（1996）The Concept of Family Resilience : Crisis and Challenge, *Family Process*. 35(3), 261–281.